



## できごと

8月3日(木)に、「小さな親切」運動静岡県本部主催の紙芝居講座「紙芝居 in しずおか」が、「紙芝居の魅力とその秘密」をテーマに、静岡市葵区のアゴラ静岡で開催されました。(同様の講座は、沼津と浜松でも行われました。)

講師の日下部茂子氏は、童心社編集者であり、紙芝居文化の会企画広報委員も務められ、紙芝居文化の発展・普及に尽力されています。

日本独自の文化である紙芝居について、その魅力、歴史と特性、選び方や演じる上での注意点まで、実演を交えながら話され、60人ほどの参加者は講演と紙芝居に引き込まれていました。

(裏面にて、概要を紹介します。)

## 子ども図書研究室のテーマ展示 ただいま展示中です!

「紅葉・黄葉・落ち葉の本」

第52回青少年読書感想文全国コンクール課題図書  
静岡県夏休み推せん図書等  
全国学校図書館協議会選定第39回夏休みの本  
静岡県教育委員会青少年課選定優良推奨図書  
新着図書も常時展示中です。

## イベント情報

ブラティスラヴァ世界絵本原画展

2005年度受賞作品や日本人作家の作品を中心に、世界の絵本の魅力を紹介します。

会場：静岡アートギャラリー

(静岡市駿河区南町18-1 サウスポット静岡3階)

期間：10/7(土)～11/26(日)

休館日：毎週月曜(10/9は開館) 10/10

入館料：一般1,000円/大高生800円/中学生以下無料

問合せ先：TEL 054-289-5400

## 新着図書から

### 絵本

『せいくんとねこ』



おはなしえほんシリーズ 1

矢崎節夫 / 作

長新太 / 絵

フレーベル館

2006年5月

せいくんが魚を食べようとすると、隣の猫が現れる。魚が食べたい猫は「せいくんに たべられるより、ねこに たべられるほうが さかなは しあわせだと おもうな。」と言って、その理由を話す。さらに猫は「それに、ねこは たべた さかなの ことを、いつも わすれない。」とも言うけれど、せいくんだって昨日も魚を思い出して...。さて、魚を食べるのはどちら？

猫とせいくんとのやりとりや、豊かな表情が楽しい。【幼児から】 (宮崎)

### 知識

『よいこととわるいことって、なに?』



こども哲学 1

オスカー・ブルニフィエ / 文

西宮かおり / 訳

クレマン・ドゥヴォー / 絵

重松清 / 日本版監修

朝日出版社 2006年6月

なぜどろぼうをしてはいけないのだろう？ 悪いことだから？ では悪いことをしてはいけないのはなぜだろう？ 子どもは「よいこと」「わるいこと」に関してさまざまな疑問を持つ。この本では、子どもが日常で考えるような6種の疑問に関し、子どもの視点からの回答例と、そこから生まれる新たな疑問を紹介している。

疑問に対し決まった答えを示すのではなく、その疑問を広げていくことで、「考える」ということを教える1冊。『きもちって、なに?』も同時刊行。【小学校高学年から】 (渡辺勝)

## 紙芝居講座「紙芝居 in しずおか」 報告

**講**師の日下部茂子氏は、童心社の編集者として多くの紙芝居や絵本の制作に携わるとともに、紙芝居文化の会などで紙芝居の普及、広報につとめている。講演では、紙芝居の歴史やその魅力を、まついのりこ氏など紙芝居作家と対話したことを絡めて紹介した。また随所で行われた紙芝居の実演は、参加者を紙芝居の世界に引き込むとともに、講演の内容を、実感をともなって理解されるものとしていた。

**紙**芝居の歴史から講演は始まった。1930年代の大恐慌の時代にまたたくまに街頭紙芝居が広まったが、その多くはセンセーショナルな続きもので、作者が子どもに本当に大切なものを手渡そうとした作品ではなかった。戦前にも高橋五山の幼稚園紙芝居や、日本教育紙芝居協会の教育紙芝居など、子どものための質の高い紙芝居を目指す動きがあったが、戦争が激しくなるにつれて、大人を対象とした国策紙芝居が多数出版されるようになった。

戦後になると、街頭紙芝居が復活する一方、教育紙芝居も復活した。また、戦争に利用された反省から、平和運動を伝える紙芝居も数多く制作された。その後、日本教育紙芝居協会の活動は1957年に設立された童心社に引き継がれていく。60年代には公共図書館での紙芝居の貸出が開始され、80年代には手作り紙芝居の運動が起り、90年代以降にはベトナムをはじめとした海外への広がりをみせるようになった。

**絵**本は、読者が自分のペースで絵本・作家の世界に入っていき個の感性を育むもの。これに対して紙芝居は、作家の世界が出てきて広がる中で、演じ手と観客がコミュニケーションすることによって共感の感性を育むものである。

紙芝居は物語完結型と観客参加型に分けられる。例えば、フランス民話にもとづいた『あひ

るのおうさま』（堀尾青史／脚本 田島征三／絵 童心社）は作品が物語として完結している。一方、『おおきくおおきくおおきなあれ』（まついのりこ／脚本・画 童心社）等は、作品の構成上、観客が声を出してコミュニケーションすることを必要としている。どちらも共感を呼ぶ性質を持っているが、特に観客参加型は紙芝居の特性がより強く感じられるものとなっている。

**紙**芝居を選ぶ際には、「作品の本質に大切なものがこめられているか、多くの人が共感できるか、演じ手自身が共感できるか」といった内容面と、「主題に集中できる絵か、文章がせりふ中心になっているか、「抜き」を効果的に生かせるか」といった形式面の両方を考える。

演じる際には、できるだけ集中できるよう舞台を使う。舞台の扉を開ける・閉める、紙芝居を抜く・差しこむといった動きを大事にする。また、演じる際の間（ま）に気をつけ、作品に自然に気持ちを入れていく。しかし、演じるといっても、声色をつくったり、パフォーマンスをしたりすると作品が変質してしまう。

子どもたちは紙芝居に共感すると、何度でも演じてほしいと言う。そうした紙芝居の魅力と特性をよく理解し、子どもたちに共感の喜びを届けていくことが大切である。

\* 県立中央図書館では、郷土資料コーナーに郷土人作家の紙芝居を所蔵しています。

### 所蔵資料から

研究書

『紙芝居・共感のよろこび』



まついのりこ / さく

童心社

1998年9月

多くの観客参加型紙芝居を手がけたまついのりこ氏の著作。紙芝居の特性や演じ方など、今回の講演のエッセンスの多くも、絵と図でわかりやすく解説されている。【小学生高学年から】

\* 本資料は閲覧室にあります（375.19/マツ）

（新出）

\* 表紙画像はすべて出版社の許可を得て掲載しています。